

山本五十六

「悲劇の名将」と呼ばれるが、「名将」かどうかはともかく、「悲劇」であるのは間違いない。悲劇の、と言われるのは、数年間アメリカに滞在し、敵の工業生産能力を知り尽くし、仮に日米間で戦争が起こっても、決してワシントンまで攻め込むことなどできないことがわかっていながら、1年半くらいはあばれまわってみせるが、その後は心許ない。だから、米国や米国人の心が折れそうなほど圧倒的な勝利を続けて講和する努力を怠らないように、と政府要人に頼みこんでいた。しかしながら、講和をするくらいなら、初めから戦争を仕向けてはこないだろう。セオドア・ルーズベルトのオレンジ・プランから始まり、フランクリン・ルーズベルトに至る数十年、日本を嫌い続け、当然人種差別があるから、欧米の代表として戦争をせざるを得ない状況に日本を追い込む。戦わずに降伏したなら植民地である。敗戦後の数年間よりひどい状況が未来永劫続くのである。いわゆる東京裁判でインドのパル判事が「・・・それにしても、アメリカがあそこまで追い詰めたなら、モナコやルクセンブルグのような武器なき小国といえども起ちあがったであろう」と表現したくらい仮借のないものだった。それに加え、「宣戦布告なき卑怯な先制攻撃」と喧伝され、米国市民を怒らせてしまった。宣戦布告なんかいらなかったのだ。米国は、いわゆるハル。ノートで宣戦布告をしているのだから、自衛戦争だ、と世界中に宣伝してもよかったのに、外務省の無能によって、遅れた、だのごちゃごちゃ言われることなく、米国民には内緒にしていたハル・ノートや経済封鎖があったことなどを訴えたらよかったのだ。ましてや、米国の常套手段じゃないか。メキシコからテキサスを奪ったとき、アラモの砦を見捨て、この「非道」に起ちあがる。米西戦争でもメイン号を自らの手で沈没させながら、スペインの所為にして、戦争に持っていく。ハワイも同じで、先に相手が攻撃をするように持って行きながら、国民に「一方的に、卑怯なだまし討ち」と宣伝しながら、実際には予定通りだった。米国をよく知る山本五十六なら知らないはずがない。

で、肝腎の「相手の心が折れそうな勝利」は、一度もなかった。奇襲のはずであったハワイの真珠湾攻撃においても、ごく少数の旧式戦艦を擱座させたのみで、空母はおらず、石油タンクも修理施設も攻撃することなく、単なる自己満足で逃げ出すような弱将に攻撃させたのは、人事権を持つ軍令部総長永野修身の失策であったはずだが、事実上永野には定見も戦略眼もなく山本の言いなりであったから、山本の人事である。その上、結構な被害がでていいる。しかし、もっと大きな損害が出てやむを得ないこと、すなわち全滅覚悟の真珠湾攻撃だったのではないか。「乾坤一擲」の大ばくちであったはずである。

このとき、攻撃したのは、空母とそれに乗船する戦闘機や爆撃機、駆逐艦など

の船団で、小澤治三郎中将の発案である航空艦隊である。第一航空艦隊の司令官が南雲忠一中将、第二航空艦隊の司令官は山口多聞少将で、全体の司令官は南雲である。ハワイの軍港施設に対する破壊が足りないと山口少将は幾度も具申していたが、南雲とその参謀長草鹿龍之介中将には通じない。戦略眼も戦術眼ももたない上層部に、戦を知らない源田実が航空参謀である。これでは勝つべき闘いも勝てるはずがない。山口少将も航空隊長の淵田美津雄も第二次攻撃の準備が整っていた。

後述するが、小澤中将の考えでは、自分が一航艦の司令長官だったら、という思いがあっただろうし、ハンモック・ナンバーが上であっても、役に立たない連中が多かった、ということだろう。

そこで、山本五十六のファンもいるが、生出寿氏は、「凡将山本五十六」「勝つ司令部負ける司令部」を書いた。これは、ハワイ奇襲攻撃隊航空隊長淵田美津雄も認めている。

アメリカは、米国の日本国債の凍結、石油の禁輸と徐々に経済制裁を強めてくる。石油など、90%がアメリカからの輸入に頼っていたから、日本は、通常的生活さえ成り立たなくなる。やむなく、日米戦争に突入していった。そして、石油の入手は、蘭印（オランダ領インドネシア）を目指す。他の鉱石は、マレーシアなど、イギリスやフランスの植民地だった地域を目指す。アメリカの植民地であるフィリピンも攻略し、日の出の勢いであった。フィリピン以外でも、陸軍の活躍が目立つ。マレー沖海戦でイギリスの戦艦プリンス・オブ・ウェールズを航空機だけで撃沈し、チャーチルが腰を抜かしそうになった。遠くイギリス領のセイロン（現スリランカ）上空の空戦では零戦が圧倒的な勝利を挙げる。「まるで演習のごとし」

零戦は確かに強かった。1機で2機相手なら絶対有利。3機4機で初めて対等になる、といっても、戦闘員の補充はままならない。しかもパイロットを大切にせず使い捨て同然。これでは、戦力が先細りになっていく。現にそうだった。

知将小澤治三郎大將は最後の連合艦隊司令長官であるが、「敗因の最大のものは、人事のミスである」と喝破しておられるが、ハワイもミッドウェイも弱将南雲率いる一航艦と二航艦、それに潜水艦である。ミッドウェイ海戦のとき、軍令部はミッドウェイ島を攻略するものと理解し、これを南雲・草鹿に伝える。ところが、ミッドウェイ島を攻撃しているときに側面から敵が現れたときにどうするか？ 源田が「鎧袖一触ですよ」と言ったところ、山本はキッとになって「そのような考え方ではいけない。島を攻撃すれば必ず空母が現れる。このたびの作戦は、

この空母を撃滅することが主眼である。魚雷を攻撃機からはずしてはならない！」と注意している。南雲には、軍令部の話と異なった意見だったから、混乱し、結局理解できなかつたらしい。で、魚雷をはずしてしまって・・・索敵を疎かにした攻撃中に敵空母が現れる。慌てて陸地を攻撃する爆撃機の爆弾をはずして魚雷に付け替えさせる。このときに山口多聞少将は陸地用の爆弾装着のままでいいから敵空母の滑走路に落とせばいい、と具申している。このとき、味方空母が撃沈される30分以上前には、攻撃機の発進が可能であった。それを無視してわざわざ交換するものだから、1時間半もかかる上に甲板上に爆弾と魚雷がゴロゴロしている。敵雷撃機は、半ば特攻のつもり、自滅覚悟で、爆撃隊に「オレたちの敵を討ってくれ」と頼んでいた。零撃退は上空警戒の零戦が撃墜したが、そのため上空がからっぽになり、違う角度からSBD ドーントレスがやってきて甲板に爆弾を落とし、わずか5分間で旗艦赤城をはじめ、4隻中3隻の空母が大爆発とともに炎上し、味方の爆弾にも当然引火し、わずかな時間で沈没してしまった。わざわざ敵のために、日本軍の爆弾を集めておいてくれたようなもの。これを「運命の5分間」と称するが、なに、単なる索敵を怠たり、せっかくの山口多聞少将の意見にも耳をかさず、結局は「間の抜けた5分間」だったにすぎない。一航艦の幕僚たちは責任を取って自決する、というのを南雲も草鹿も拒否し、逃げ出した。・・・戦後になってから草鹿は、何かと言えば「下衆（下司）の策」と称していたが、ニミッツの作戦についても同じ評価を下した。・・・その「下衆の策」に敗れたのはどこのだれか！ のこった二航艦の山口多聞少将は空母飛龍で孤軍奮闘し、多くの零戦を収容したが、これも爆撃弾をうけ、ミッドウェイ海戦で数百人単位のベテラン零戦搭乗員を失い、空母飛龍の沈没とともに加来艦長とともに山口司令官も空母とともに沈んでいった。責任をとるためだったろう。・・・まともな司令官が戦死し、まぬけな司令官が残る。

この敗戦の原因は、その直前に発生した珊瑚海海戦の教訓を生かさなかつたためともいわれている。驚くべきことに、日本海軍はすべての海戦についての検討をしなかつたという。だから成功した、あるいは失敗した作戦の反省もなく、「あれは運が悪かつたのだ」ですませていた。

山本五十六の人間観察の眼というのは、どこかいびつで、黒島などを偏愛する。黒島を偏愛した理由が、2人とも賭博が好きであることや、奇を衒う作戦を好み、鬼面人を驚かす、つまり正当な作戦を嫌う傾向にあった。こういう奇策は、相手が知らなければ有効かも知れないが、のちに判明するように「暗号をすべて解読されている場合は、飛んで火に入る夏の虫状態になってしまう。」現にそうなって、山本は戦死することになる。・・・自殺説もあるが、槌端を連れての自殺はありえない。

珊瑚海海戦の教訓は後述するが、「愚将」南雲は一顧だにしなかったに違いない。

アメリカの司令長官ニミッツは、ハンモック・ナンバー29の少将であったが、日米戦争あるいは太平洋戦争の開始にあたり、28人抜きで抜擢された。日本は硬直したように、官僚的な判断しかしなかった。平時の序列どおりのまま、戦争に突入した。

日本の海軍は、勝海舟と坂本龍馬によって作られたが、近代的な戦争になる日露戦争にあたり、過去の栄誉や勲章はいらない、と新たな発想で事実上近代海軍をつくったのは山本権兵衛であり、薩摩閥でも先輩たちが大勢のこっていた。そのため、海軍大臣の西郷従道が後ろ盾になり、権兵衛の思う通りの人事ができるようにした。つまり、勲章だけで近代戦に役に立たない大将以下をすべて退役させた。このとき、東郷平八郎は、瀬戸際だったが、舞鶴の鎮台に置いておかれた。で、日露戦争開始にあたり、連合艦隊司令長官に抜擢された。バルチック艦隊を完膚なきまでに圧倒し、世界中を驚かせることになる。ニミッツは東郷提督と若いころに直接会って尊敬するようになり、葬儀にも来日し、終生崇敬の念をいだいていた。皮肉なものである。東郷平八郎の抜擢の理由は、いくつかあるが、最大のものは「東郷は運がいい」ということらしい。・・・余談ですが、零戦の搭乗員になれるかどうか、いくつかの関門があるが、最後は人相、手相、そして骨相学だったらしい。・・・つまり、人知を超えた部分があるらしい。

日本には、すでに米軍と同じような発想で司令官を選ぶ方法があるのがわかっているのに、と我々は思うが、当事者たちは、プライドだけは高いから、まったく考慮しなかったということである。

人事のミスは、ひとつ目は南雲・草鹿のコンビを一航艦の司令官に任命したこと。源田を航空参謀につけたこと。

海軍部内では、東郷と秋山のような関係は、山本に配するに槌端である。槌端は、38歳で、巨大な頭脳がつとに知られていた。爆撃戦術を体系化しとことではられていた。ところが、黒島を偏愛してしまった。山本の同期生井上繁則大佐の娘と槌端が結婚していたことから、その井上には、「おまえの婿をそのうち呼ぶからな」と言っていた。槌端は、山本好みの秀才であり、もし彼が参謀だったら、ミッドウェイ海戦も違った形になったであろうと言われている。槌端が呼ばれた頃には、ガダルカナルから撤退した時期で、それまでに、開戦時と比べるべくもなく、航空機はじめ、戦力が大幅に低下した状態であった。これがふたつ目の人事ミスである。なぜ初めから槌端をつかわなかったのか？

ハワイ作戦のあと、海軍大佐黛治夫が戦艦長門に山本とその幕僚に会いに行ったとき、これからは航空戦主体で行く、という。ところが、その航空機の補充のあてがあるのか、といえは言葉を濁す。とてもじゃないが、米国にかなうはずが

ない。いかに零戦が優れていると言っても、4000機作れば、米国は1万機のF4F、F4U、F6Fを作成する。

ミッドウェイ海戦に敗れた時点で、山本は責任をとって辞すべきだった。あるいは、ハンモック・ナンバーなどを考慮せずに人材を抜擢すべきであった。

山本は部下思いの司令官だから、南雲も源田もその流れで一航艦にいたわけだが、部下と日本の国とどちらが大事なのか？

黒島は、参謀というより、町の発明家と考えた方がよさそうだ。櫻花もそうだが、回転の改良型（改悪型）などなど、つぎからつぎへアイデアが湧き出してくる一種の天才だな。

珊瑚海海戦の教訓は、

1. ポート・モレスビー攻略は不可能である
2. 敵の戦意はさかんである
3. 綿密・迅速・正確な索敵が必要だ。が、ミッドウェイではこれを怠っている
4. 米迎撃戦闘機や対空兵器は威力がある
5. 米雷撃隊は劣る。・・・しかしミッドウェイでは、特攻隊のように日本の戦闘機を自分たちの方に注意を向けさせて、爆撃隊に後事を託した
6. 5に述べた急降下爆撃隊は優秀で、どこから来るかわからない
7. 米飛行機にたいしては、一発必中主義は通らない。弾幕射撃が有効である

これら、いずれもこれ以後の闘いでも通じるものであるが、ミッドウェイ海戦の一航艦は、まったく顧みることがなかった。空母が3隻沈没し、幕僚たちが自決するというのに、南雲や草鹿は、これを拒否している。まことに見苦しいかぎりである。

戦艦大和は、一航艦のあとを数百海里離れてついていったが、これは、自分たちも出撃したように見せかけ、恩賞にあずかろうとしたものらしい。(生出氏の説) ミッドウェイ海戦で部下たちが前線で戦っているのに、山本五十六らは将棋をさしたり、大和ホテルと揶揄されたように毎日のごちそうの連続である。ガダルカナルでも「い」号作戦でのニューギニアでも餓死者が大量に発生している。ニューギニア戦線では、90%が餓死である。・・・まあ、これは牟田口廉也のインパール作戦でもそうなのだが、食料や弾薬を補給するには、兵の2~3倍以上の輸送隊が必要であることを知らないか、知っていながら見殺しにしたか。敗れたならば、自慢の40センチ砲をミッドウェイ島に打ち込むなどをしてよかった

のではないか。

「い」号作戦とは、山本五十六自らが陣頭に立ち、ラバウルを中心にした航空機の総力戦なのだが、この時期、つまりミッドウェイで優秀なパイロットを大量に戦死させたあとだから、作戦としては、航空機の数があまりに少なすぎた。

昭和 18 年、アッツ島玉砕後、米海軍長官ノックスは、「日本は近代戦を理解しないか、あるいはまた近代戦に参加する資格がないか、いずれかである。」ときわめて妥当な判断を下している。

日露戦争終結後、東郷平八郎の「連合艦隊解散の辞」を聞いたセオドア・ルーズベルトは即刻翻訳させ、全兵士に配布した。日本軍は、これを、意図的かどうか、無視して忠実ではなかった。局地戦では、この差が現れたように見える。

ニミッツは、山本の作戦はもうわかっている。だからそのまま残してもいいのだが、「山本の後にもっとすぐれた提督がいたら」と周囲に尋ねると、「山口多聞少将がいますが、ミッドウェイで戦死しましたから」・・・これで山本機撃墜を遂行することにした、という。恐るべきは、そこまで情報として米軍が将校佐官尉官にいたるまで、調査していたことである。情報戦においても歯がたたなかった。ノックスの言うとおりでである。

元戦艦「大和」の艦長松田千秋、連合艦隊参謀土肥一夫などが、しみじみと語った話で、「死んだ人やひどい目に会った人々には気の毒だが、戦争は負けてよかった。もし戦争に勝っていたら、相変わらず陸海軍の軍人がいばりちらして、いまのように自由になんでも言えて、なんでもできる世の中にはならなかったろう」

「ブーゲンビリアの花」の中に、樋端は開戦前から軍務局で働いていたが、将来の司令官たるべき人材であった。(余談になるが、海軍大学を出ているから、中将までは確実。あと大将になるには、だれかの引きがないとなれないらしいが、海兵で一期下に高松宮がいたし、同じ部署で仕事をしていたから、まちがいないところであった。郷里の香川県でも大いに将来を期待されていた。) 杉田主馬氏の話で、この方は東大から海軍省に派遣された法学士で、ポツダム宣言に際し米内海軍大臣を大いに助けた逸材であった。その杉田文官が「私は学生時代、軍人というのは、馬鹿と石頭の集団と考えていたし、海軍省に入ってから海軍士官の

秀才なんてたいしたことはないと日ごろ思っていたが、樋端さんには驚いた。彼の所属する軍務一課から起案してくる文書は完璧で、修正を要することは全然なく、他の課のように安易に訂正したり妥協することはしなかった。またなにか疑問点があって彼に質問し説明を求めるとまさに理路整然として一部の隙も無かった。懇切丁寧に軍事の専門事項も解説し、その態度も謙虚で驕り高ぶるところはなかった。これが本当の海軍の秀才かと頭が下がる思いであった。」しかも偉そうにする人間ばかりだと思っていたが、「樋端さんには、まったくそのようなところがなかった」と述懐し、軍人観を改めさせられた。まことに惜しい人材を失ったものだと言った。(樋端の稿は別にまとめる。)・・・山本は、この大事な人材を道連れにしてしまった。若手中堅の将校たちから、長官の変わりはいるが、樋端の頭脳の代わりはいない。樋端がいなければもうだめだ、との怨嗟の声が溢れ出た。

樋端を失っただけでも、「凡将」山本五十六だ！

余談になるが、註日米国大使グルーは、日米戦争が起こらないように最大限の活躍をした、親日家の優秀な大使であった。しかしながら、米国が国家を挙げて日本を叩きにくるなら、一大使の意見はとおらない。「国家を挙げて」というが、ルーズベルトが、でいい。